「美和子はマゾだぜ」

毅一は、ぼくの母を自分の女と言わんばかりに呼び捨てにする。マゾだといわれて全裸の母は、唇をかんだ哀しそうな表情でうつむいている。

両手を背中で厳しく縛られ、丸く張ったたわわな臀を赤く腫らした母の髪を摑んで、毅一は自分の股間に顔を埋めさせるんだ。母は哀しいほど素直に含んでいく。もう何度も毅一のものを口に咥えている母。抵抗するすべを奪われている。

母の白い裸体が痛いほどまぶしい。ぼくの股間が固くなっている状態を、母の前で仁王立ちになっている毅一は声を立てて笑うんだ。ぼくの母は美しい女性だと思う。若々しい母は、ぼくの自慢だった。その母が奴隷のように扱われ、陵辱されているというのに、ぼくは股間を固くさせてしまうんだ。心底情けなかった。息子として･･･そして、ひとりの男として･･･。

毅一がうめいた。腰を前に突き出している。つきだした

その分、母は喉奥にまで咥えることになる。母の口の中にあいつは精を放ったんだ。

「全部飲めよ！」

毅一の残酷な命令がとぶ。母は、ぼくに見られまいと白い裸体を小さくして隠すようにうずくまりながら、毅一のザーメンをすべて飲んでいた。母の白い喉がエロチックに上下する。どろっとした精液を母は一滴もこぼさないように飲んでいくんだ。その姿を毅一は満足そうに立ったまま眺め、にやりと笑っている。射精しても毅一の股間の太く長い肉棒は、衰えを知らない。若い男根は隆々として筋肉質の下腹部にくっつかんばかりに勃起している。肉の凶器、そんな表現があいつの股間のものにはぴったりだった。まがまがしい男根の亀頭は大きくえらが張り出ている。母は腰を乱暴に抱かれた。犬のように四つん這いにした母を後ろから貫く体位を毅一は好む。

「美和子、俺のペニスで征服されている感じがするだろ？お前のおまんこは串刺しだぜ」

腰を抱いて男根を挿入した毅一は、母の眩いばかりに白い双臀の狭間に出し入れする。激しい抽送だ。貫かれる母の裸体は、荒波にもまれる一枚の木の葉のように前後に揺すられる。分泌した粘液のこすれる湿った音が間断なく聞こえだす。淫靡な音だった。母は四つん這いの裸体を揺すられ、豊麗な乳房を意思とは関係なく弾ませる。まるで乳房自体が母の哀しみを知らずに踊っているようだ。それだけ、毅一の腰は深く激しく打ち込まれるのだ。母の尻肉を叩きながら毅一は時間をかけて性交を楽しむ。その余裕が、何にもの女性を歯牙にかけてきた毅一にはあるのだ。同級生だというのに性技にたけている。

　母があえぎ声を洩らし始めると、ぼくの股間は一気に勃起してズボンを突き上げる。毅一がいよいよ咆哮をあげる。ずんと突きさしたペニスを抜く。亀頭の鈴口から白いザーメンがどっと飛び出し、母の臀部を汚していく。母は四つん這いの裸体をくずし、その場に倒れこんだ。かけられたどろりとしたザーメンが母の双臀の亀裂に沿って垂れてい

く。それは母にとっても息子のぼくにとっても残酷な風景だった。

「次は美和子のアヌスをいただくぜ」

激しい性交によって疲れきった母に安息のときはまだ許されない。二度の射精をしたというのに毅一の男根はまだその機能を誇っている。まだ肉の凶器だった。革ベルトがビシッと打ちつけられる。精液にまみれた母は、再び四つん這いになることを強要されるのだ。

　これから肛交がはじまる。毅一の子分たちも股間を勃起させながら順番を待ち構えている。今夜も終わりの見えない輪姦劇が繰り広げられるのだ。

「美和子のお尻の穴を犯してください」

母は無理矢理に言わされている。頬を何度も叩かれて卑猥になるように命令されている。破廉恥なことを母の口から言わせるために毅一たちは暴力を振るっている。ぼくは握り拳を固くしながらその場でじっとしているしかなかった。情けない男だ。自慢の母をけがされているというのに

助けることを放棄している。

　母は、命令通りに卑猥になった。毅一たちは母の頬を叩き、次にぼくに暴力を振るうと脅かしている。母は理不尽な命令に従うしかなかった。四つん這いのお尻をペニスを誘うように左右に振っている。涙ぐみながら肉感的な白い尻を媚びるように振っている。そんな母に毅一が耳元でささやく。

「美和子はお尻の穴でペニスを食べるのが好きよ。息子の同級生様に教育されてお尻の感度はよくなっているわ。アナルセックスの好きな破廉恥な美和子を後ろからどうぞ串刺しにしてください。お願いします」

そんな言葉を吐きながら、母の瞳からとうとうたまっていた涙がこぼれる。頬を流れる母の涙は、不良たちの加虐心をくすぐるためのものでしかない。取り囲んでいる不良たちからゲラゲラと哄笑が起きる。笑われた母は、首筋まで桜色に染めている。

「美和子は尻の穴でペニスを食べるのが好きなんだってさ。

今夜もいっぱい食べさせてやろうぜ」

「俺たちの尻教育が上手だから感度がアップしたんだろ。アナルセックスで逝くこともできるようになったよな」

「息子の前だって言うのに、尻の穴を掘られてヒイヒイよがり声を立てる未亡人奴隷だよな」

「美和子は俺たちの尻穴奴隷さ」

不良たちは好き勝手に哀しみに沈んでいる母を茶化している。母は力なく艶やかな髪を左右に振って恥辱のときを耐えていた。

　いよいよ、毅一は勃起した男根を母の双臀に押しつけた。四つん這いの母は、息を吐いている。排泄器官に迎えるのだ。本来、性交をするための器官ではない。外側から太い男根が埋められるのだから、母の表情からそのつらさが分かる。でも母は息を吐き、排泄器官を緩めて、迎え入れやすいようにしている。毅一のあんなにも太いものが入るなんて、想像もできないことだった。もちろんアナルセックスのことは知っている。アナルセックスをしている女性の

写真だって見ている。でも、清楚なぼくの母がお尻の穴までも毅一の肉の凶器で貫かれるなんて・・・・・・。

「ううっ」

その母のうめき声から、毅一のものが挿入されたことを知る。さらに毅一は腰を押し進めている。

「ああーっ」

母の美しい顔がのけぞった。艶やかな髪がさわさわと揺れる。毅一の下腹部が母の臀丘に密着する。

「おいしいだろ？」

毅一が母の髪をつかんで手前に引っ張った。母は唇を噛んでいた。

「おい、聞いているんだぜ！答えな！」

毅一のドスをきかせた声が響く。耳をふさぎたくなる声だ。

「お、おいしいわ・・・」

母はかすれた声で答えた。